

# 中経 論壇

経営支援NPOクラブ理事  
手塚 昂宏



私は中小企業支援のNPO法人で活動しているが、そのNPOで中高への出前授業なども時折行っており、教育現場の現状について強い関心がある。最近感じたことを二つ述べてみたい。

一つは、教師の負担軽減のために、シニアを活用して地域がバックアップを行ったらどうかということである。私は、地元では町会の役員も務めているが、その町会活動の一つに緊急避難所運営委員会がある。区役所、各町会の役員に加え、避難場所に指定された小学校の先生方も出席し、緊急事態が生じたときの役割、避難手順などの取り決めや、仮設トイレの組立実習などを行っている。教師の勤務時間は長いようで、会合が終わる午後8時ころでも、大方の先生方が残って仕事をしているのを何度も目撃した。教える範囲も非常に広く、特に小学校の先生は、国語、算数、理科、音楽、体育、さらに最近では英語までもカバー

## 教育現場でシニア世代の活用を

### 若き教師への応援メッセージ

しなければならない。授けると思う。業の準備も大変であろうし、いじめ問題の発生や、「モンスターペアレント」への対応もあろう。先生の仕事は、本当に大変だと思う。

文科省は「土曜学習応援団」を提唱し、地域のシニア世代に要請し、理科の実験や剣道・柔道、囲碁・将棋などを教える仕組みを作っているが、十分に浸透していないようである。自治体や学校が、もっと積極的に、シニア世代へ協力を呼びかけるべきではないか。町会組織を通じて、シニアに働きかけるのも効果的である。

二つ目は、学校の先生が、教師以外の仕事の経験を行うことを制度化することである。

小中高の先生は大学を卒業し、教職の世界だけで過ごすことになる。これを見直してみたらどうであろうか。例えば30歳前後で、1年間ほど別の仕事を体験する。近所のスーパーの売り場、農業、工場勤務など、本人が選択できるようにし、教師の収入は保証する。受入側は給料の3分の1を払い、残り3分の2は各自自治体が払う。1年後、教師を続ける意思があれば、また教職に戻る。

若い先生方が教職以外の世界を経験することにより、子どもの指導もより視野の広いものになると思う。この体験実習で生じる隙間は、シニア世代の活躍で埋めれば、地域ぐるみで児童を支えるという一体感も生まれるであらう。